

如来滅後五五百歳始觀心本尊抄

本朝沙門

日蓮

撰す

摩訶止觀第五に云く、(世間と如是と一なり、開合の異なり)

「夫れ一心に十法界を具す。一法界に又十法界を具すれば、百法界な

り。一界に三十種の世間を具すれば、百法界に即ち三千種の世間を具す。

此の三千、一念の心に在り。若し心无くんば已みなん。介尔も心有れば即

ち三千を具す。乃至、所以に稱して不可思議境と為す。意此に在り。」等

云云。(或る本に云く、一界に三種の世間を具す)

問うて曰く、玄義に一念三千の名目を明かすや。

答えて曰く、妙樂云く、明かさず。

問うて曰く、文句に一念三千の名目を明かすや。

答えて曰く、妙樂云く、明かさず。

問うて曰く、其の妙樂の釈、如何。

答えて曰く、「並びに未だ一念三千と云わず」等云云。

問うて曰く、止觀の一・二・三・四等に一念三千の名目を明かすや。

答えて曰く、之無し。

問うて曰く、其の證、如何。

答えて曰く、妙樂云く「故に止觀の正しく觀法を明かすに至りて、並びに

三千を以て指南と為す」等云云。

疑いて云く、玄義第二に云く「又一法界に九法界を具すれば、百法界に  
千如是あり」等云云。

文句第一に云く「一入に十法界を具すれば一界又十界なり。十界に各  
十如是あれば即ち是れ一千なり」等云云。

観音玄に云く「十法界交互なれば即ち百法界有り。千種の性相、冥伏  
して心に在り。現前せずと雖も宛然として具足す」等云云。

問うて曰く、止観の前の四に一念三千の名目を明かすや。

答えて曰く、妙樂云く、明かさず。

問うて曰く、其の釈、如何。

答う、弘決第五に云く「若し正観に望むれば全く未だ行を論ぜず。亦廿  
五法に歴て、事に約して解を生じ、方に能く正修の方便と為すに堪えた  
り。是の故に前の六は皆解に属す」等云云。

又云く「故に止観の正しく観法を明かすに至りて、並びに三千を以て指  
南と為す。乃ち是れ終窮究竟の極説なり。故に序の中に、説己心  
中所行法門と云う。良に以有るなり。請う、尋ね讀まん者、心に異縁无  
かれ」等云云。

夫れ智者の弘法三十年。廿九年の間は玄・文等の諸義を説きて五時八教・  
百界千如を明かし、前五百餘年の間の諸非を責め、並びに天竺の論師の未  
だ述べざることを顕す。

章安大師云く「天竺の大論尚其の類に非ず。震旦の人師何ぞ勞わしく

語るに及ばん。此れ誇耀こやうに非ず、法相ほつそうの然しからしむるのみ」等云云。

墓はかな无なきかな、天台まつがくらの末学けごん等、花嚴しんごん・真言がんその元祖ぬすびとの盗人じゅうほうに一念三千の重寶じゅうほうを盗み取られて、還かえりて彼等もんけが門家なと成りぬ。

章安かね大師か兼ねて、此じの事じを知りて歎いわきて言ことばく「斯この言ことば若おし墜おちなば将来しむべし悲しむべし」云云。

問うて曰く、百界千如と一念三千との差別しゃべついかん如何。

答えて曰く、百界千如は有情界うじょうかいに限り、一念三千は情じょう・非情ひじょうに亘わたる。

不審ふしんして云く、非情ひじょうに十如じゅうに是わは亘わたらば、草木そうもくにも心有りて有情うじょうの如く成佛ぶつじょうを為なすべきや、如何いかん。

答えて曰く、此じの事じ難信難解なんしんなんげなり。天台てんたいの難信難解なんしんなんげに二有り。一には教門きょうもんの難信難解なんしんなんげ、二には觀門くわんもんの難信難解なんしんなんげなり。

其そのの教門きょうもんの難信難解なんしんなんげとは、一佛いちぶつの所說しよせつに於て、余前にぜんの諸經しよきやうには二乘にじやう・闡提せんたいは未来永く成佛ぶつじょうせず、教主きやうしゆ釈尊しやくそんは始成正覺しじやうしやうかくなり。法花經ほふくきやうの迹本しやくほん二門にもんに來至らいしして彼かの二說にせつを壞やぶる。一佛いちぶつ二言にごん水火すいかなり。誰人たれひとか之これを信しんぜん。此これは教門きょうもんの難信難解なんしんなんげなり。

觀門くわんもんの難信難解なんしんなんげとは、百界千如ひやくかいせんに・一念三千いっぴんさんぜんにして、非情ひじょうの上うへの色心しきしんの二法にぽうの十如じゅうに是これ、是これなり。余しかりと雖もも木畫もくえの二像にざうに於ては、外典げてん・内典ないでん共に之これを許ゆるして本尊ほんそんと為なす。其そのの義ぎに於ては天台てんたい一家いっけより出いでたり。草木そうもくの上うへに色心しきしん因果いんがを置おかずんば、木畫もくえの像ざうを本尊ほんそんに恃たのみ奉ほうること无益むやくなり。

疑いいて云く、草木国土そうもくこくどの上うへの十如じゅうに是これの因果いんがの二法にぽうは、何れいずの文もんに出いでたる

や。

答えて曰く、止観第五に云く「国土世間亦十種の法を具す。所以悪国土、相・性・躰・力」等と云云。

釈籤第六に云く「相は唯色に在り、性は唯心に在り、躰・力・作・縁は義、色心を兼ねぬ。因・果は唯心、報は唯色に在り」等云云。

金毘論に云く「乃ち是れ、一草一木、一礫一塵、各一佛性あり、各一因果ありて、縁・了を具足す」等云云。

問うて曰く、出處既に之を聞く。観心の心如何。

答えて曰く、観心とは、我が己心を観じて十法界を見る。是を観心と云うなり。譬えば他人の六根を見ると雖も、未だ自面の六根を見ざれば、自具の六根を知らず。明鏡に向うの時、始めて自具の六根を見るが如し。設い諸經の中に、所處に六道並びに四聖を載すと雖も、法花經並びに天台大師所述の摩訶止観等の明鏡を見ざれば、自具の十界・百界・千如・一念三千を知らざるなり。

問うて曰く、法花經は何れの文ぞ。天台の釈は如何。

答えて曰く、法花經第一方便品に云く「衆生をして佛知見を開かしめんと欲す」等云云。是れは九界所具の佛界なり。

壽量品に云く「是の如く我成佛してより已来甚だ大に久遠なり。壽命無量阿僧祇劫常住にして滅せず。諸の善男子、我本菩薩の道を行じて成ぜし所の壽命、今猶お未だ盡きず。復上の數に倍せり」等云云。此の

經文は佛界所具の九界なり。

經に云く「提婆達多、乃至、天王如来」等云云。地獄界所具の佛界なり。

經に云く「一名藍婆、乃至、汝等但能く法花の名を持つ者を護る。福量る

べからず」等云云。是れ餓鬼界所具の十界なり。

經に云く「龍女、乃至、等正覺を成ず」等云云。此れ畜生界所具の十界なり。

經に云く「婆稚阿修羅王、乃至、一偈一句を聞いて、阿耨多羅三藐三菩提を得」等云云。修羅界所具の十界なり。

經に云く「若し人佛の為の故に、乃至、皆已に佛道を成じき」等云云。此れ人界所具の十界なり。

經に云く「大梵天王、乃至、我等も亦是の如く、必ず当に作佛することを得べし」等云云。此れ天界所具の十界なり。

經に云く「舍利弗、乃至、花光如来」等云云。此れ声聞界所具の十界なり。

經に云く「その緣覺を求むる者、比丘・比丘尼、乃至、合掌し敬心を以て具足の道を聞きたてまつらんと欲す」等云云。此れ即ち緣覺界所具の十界なり。

經に云く「地涌千界、乃至、真淨大法」等云云。此れ即ち菩薩所具の十界なり。

經に云く「或いは己身を説き、或いは他身を説き」等云云。即ち佛界所具

の十界なり。

問うて曰く、自他面の六根共に之を見る。彼此の十界に於ては未だ之を見ず。如何が之を信ぜん。

答えて曰く、法花經法師品に云く「難信難解」。宝塔品に云く「六難九易」等云云。

天台大師云く「二門悉く昔と反すれば難信難解なり」。

章安大師云く「佛此れを將て大事と為す。何ぞ解し易きことを得べけんや」等云云。

傳教大師云く「此の法花經は最も為れ難信難解なり。随自意の故に」等云云。

夫れ在世の正機は過去の宿習厚きの上、教主釈尊、多宝佛・十方分身の諸佛、地涌千界・文殊・弥勒等、之を扶けて諫曉せしむるに、猶信ぜざる者之有り。五千は席を去り、人天は移さる。況や正像をや。何に況や末法の初めをや。汝之を信ぜば、正法に非じ。

問うて曰く、經文並びに天台・章安等の解釈は疑網無し。但し火を以て水と云い墨を以て白しと云う。設い佛説為りと雖も信を取り難し。今數他面を見るに、但人界に限りて餘界を見ず。自面も亦復是の如し。如何が信心を立てんや。

答う、數他面を見るに、或る時は慧び、或る時は瞋り、或る時は平かに、或る時は貪り現じ、或る時は癡現じ、或る時は諂曲なり。瞋るは地獄、

貪るは餓鬼、癡なるは畜生、諂曲は修羅、毘は天、平かなるは人なり。  
他面の色法に於ては、六道共に之有り。四聖は冥伏して現れずとも、委細  
に之を尋ねば之有るべし。

問うて曰く、六道に於ては分明ならずと雖も、粗之を聞くに、之を備うる  
に似たり。四聖は全く見えず、如何。

答えて曰く、前には人界の六道をば之を疑う。然りと雖も、強いて之を言  
えば相似の言を出せり。四聖も又忝るべきか。試みに道理を添加して、万  
が一之を宣べん。

所以、世界の无常は眼前に有り、豈人界に二乗界无からんや。无顧の悪人  
も猶妻子を慈愛す、菩薩界の一分なり。但佛界計り現じ難し。九界を具  
するを以て強いて之を信じ、疑惑せしむること勿れ。法花經の文に人界を  
説きて云く「衆生をして佛知見を開かしめんと欲す」。涅槃經に云く「大  
乗を學する者は肉眼有りと雖も名づけて佛眼と為す」等云云。末代の凡  
夫出生して法花經を信ずるは、人界に佛界を具足するが故なり。

問うて曰く、十界互具は佛語分明なり。然りと雖も、我等が劣心に  
佛法界を具すること、信を取り難き者なり。今時、之を信ぜずんば必ず  
一闡提とならん。願くは大慈悲を起して之を信ぜしめ、阿鼻の苦しみを  
救護したまえ。

答えて曰く、汝既に「唯一大事因縁」の經文を見聞して之を信ぜずんば、  
釈尊より已下の四依の菩薩、並びに末代理即の我等、如何が汝が不信を

救護せんや。然りと雖も試みに之を言わん。

佛に値いたてまつりて覺らざる者の、阿難等の邊にして得道する者之有り。其の機に二有り。一には佛を見たてまつり法花にて得道す。二には佛を見たてまつらずして法花にて得道するなり。其上、佛教已前の漢土の道士・月支の外道、儒教・四韋陀等を以て縁と為して正見に入る者之有り。

又利根の菩薩・凡夫等の花巖・方等・般若等の諸大乘經を聞きし縁を以て、大通・久遠の下種を顕示する者多々なり。例せば獨覺の飛花落葉の如し。教外の得道是なり。過去の下種結縁无き者と權小に執著する者は、設い法花經に値い奉るとも小權の見を出でず。自見を以て正義とするが故に、還つて法花經を以て或は小乘經に同じ、或は花巖・大日經等と同じ、或は之を下す。此等の諸師は儒家・外道の賢聖より劣れる者なり。此等は且く之を置く。

十界互具、之を立つるは石中の火、木中の花、信じ難けれども縁に値いて出生すれば之を信ず。人界所具の佛界は水中の火、火中の水、最も甚だ信じ難し。然りと雖も龍火は水より出で、龍水は火より生ず。心得られざれども現證有れば之を用ゆ。既に人界の八界之を信ず。佛界何ぞ之を用いざらん。堯・舜等の聖人の如きは、万民に於て偏頗無し。人界の佛界の一分なり。不輕菩薩は所見の人に於て佛身を見る。悉達太子は人界より佛身を成ず。此等の現證を以て之を信すべきなり。

問うて曰く、教主釈尊は、へ此より堅固に之を秘せよ。三惑已断の佛な

り。又十方世界の國主、一切の菩薩・二乘・人・天等の主君なり。行く時は梵天左に在り、帝釈右に侍り、四衆・八部後に聳え、金剛前に導き、八方法蔵を演説して一切衆生を得脱せしめたまう。是の如き佛陀、何を以て我等凡夫の己心に住せしめんや。

又迹門・余前の意を以て之を論ずれば、教主釋尊は始成正覺の佛なり。過去の因行を尋ね求むれば、或は能施太子、或は儒童菩薩、或は尸毘王、或は薩埵王子、或は三祇百劫、或は動逾塵劫、或は無量阿僧祇劫、或は初發心時、或は三千塵點等の間、七万五千・六千・七千等の佛を供養し、劫を積み行滿じて今の教主釈尊と成りたまう。是の如き因位の諸行は、皆我等が己心所具の菩薩界の功德か。

果位を以て之を論ずれば、教主釈尊は始成正覺の佛、四十余年の間、四教の色身を示現し、余前・迹門・涅槃經等を演説して一切衆生を利益したまう。所謂花蔵の時の十方臺上の盧舎那、阿含經の三十四心断結成道の佛、方等・般若の千佛等。大日・金剛頂等の千二百余尊。並びに迹門寶塔品の四土の色身。涅槃經の或は丈六と見る、或は小身大身と現る、或は盧舎那と見る、或は身虚空に同じと見る四種の身、乃至八十御入滅、舍利を留めて正像末を利益したまう。

本門を以て之を疑わば、教主釈尊は、五百塵點已前の佛なり。因位も又是の如し。其れより已來、十方世界に分身し、一代聖教を演説して塵數の衆生を教化したまう。本門の所化を以て迹門の所化に比較すれば、一滄

と大海と、一塵と大山となり。本門の一菩薩を迹門の十方世界の文殊・  
観音等に對向すれば、猿猴を以て帝釈に比するに尚及ばず。

其の外、十方世界の断惑證果の二乗、並びに梵天・帝釈・日月・四天・  
四輪王、乃至、无間大城の大火炎等、此等は皆我が一念の十界か、己心の  
三千か。佛説為りと雖も之を信ずべからず。

此を以て之を思うに、余前の諸經は實事なり、實語なり。花嚴經に云く  
「究竟して虚妄を離れ、染无きこと虚空の如し」。仁王經に云く「源を  
窮め性を尽して妙智存せり」。金剛般若經に云く「清淨の善のみ有り」。  
馬鳴菩薩の起信論に云く「如来蔵の中には清淨の功德のみ有り」。天親菩  
薩の唯識論に云く「謂く、餘の有漏と劣の无漏の種とは、金剛喩定の  
現在前する時、極円明の純淨の本識を引く。彼の依に非ざるが故に皆永  
く弃捨す」等云云。

余前の經々と法花經と之を校量するに、彼の經々は無数なり、時説既に  
長し。一佛二言ならば彼に付くべし。馬鳴菩薩は付法蔵第十一と佛記に  
之有り。天親は千部の論師、四依の大士なり。天台大師は邊鄙の小僧に  
して一論をも宣べず。誰か之を信ぜん。其の上多を捨てて小に付くとも、  
法花經の文分明ならば少し恃怙有らん。法花經の文の何れの所にか、十界  
互具・百界千如・一念三千の分明なる證文之有りや。

随いて經文を開拓するに「諸法の中の悪を断ず」等云云。天親菩薩の法花  
論・堅慧菩薩の宝性論にも十界互具之无く、漢土南北の諸大人師、日本

七寺の末師の中にも此の義無し。但天台一人の僻見なり。傳教一人の謬伝なり。故に清涼国師の云く「天台の謬りなり」。慧苑法師の云く「然れども天台は小乗を呼びて三藏教と為し、其の名謬濫するを以て」等云云。了洪の云く「天台獨り未だ花嚴の意を盡さず」等云云。得一の云く「咄きかな智公、汝は是れ誰が弟子ぞ。三寸に足らざる舌根を以て、覆面舌の所説の教時を謗ず」等云云。弘法大師の云く「震旦の人師等、諍いて醍醐を盗みて各自宗に名づく」等云云。

夫れ一念三千の法門は一代の権實に名目を削り、四依の諸論師もその義を載せず。漢土・日域の人師も之を用いず。如何が之を信ぜん。

答えて曰く、此の難最も甚だし、最も甚だし。但し諸經と法花との相違は、經文より事起りて分明なり。未顯と已顯と、證明と舌相と、二乗の成と不と、始成と久成と等、之を顯す。

諸論師の事は、天台大師云く「天親・龍樹は内鑒冷然たり。外には時の宜しきに適い、各権りに拠る所あり。而るに人師偏に解し、学者苟くも執し、遂に矢石を興し、各一邊を保ちて、大に聖道に乖けり」等云云。章安大師云く「天竺の大論尚其の類に非ず。真旦の人師何ぞ勞わしく語るに及ばん。此れ誇耀に非ず。法相の然らしむるのみ」等云云。天親・龍樹・馬鳴・堅慧等は内鑒冷然たり。然りと雖も、時未だ至らざるが故に之を宣へざるか。

人師に於ては、天台已前は、或は珠を含み、或は一向に之を知らず。已後

の人師は、或は初めに之を破して後に皈伏する人有り。或は一向に用いざる者も之有り。但し「断諸法中惡」の經文を會すべきなり。彼は法花經に余前の經文を載するなり。往きて之を見よ。經文分明に十界互具之を説く、所謂「衆生をして佛知見を開かしめんと欲す」等云云。天台此の經文を兼けて云く「若し衆生に佛の知見无くんば、何ぞ開を論ずる所あらん。當に知るべし、佛の知見の衆生に蘊在することを」云云。章安大師云く「衆生に若し佛の知見なくんば、何ぞ開悟する所あらん。若し貧女に蔵无くんば、何ぞ示す所あらん」等云云。

但し會し難き所は、上の教主釈尊等の大難なり。此の事を佛遮會して云く「已今当説、最為難信難解」と。次下の六難九易是なり。天台大師云く「二門悉く昔と反すれば、信じ難く解し難し。鋒に當るの難事なり」。章安大師云く「佛此を將て大事と為す。何ぞ解し易きことを得べけんや」。傳教大師云く「此の法花經は最も為れ難信難解なり。随自意の故に」等云云。

夫れ佛より滅後一千八百余年に至るまで、三國に經歴して但三人のみ有りて、始めて此の正法を覚知せり。所謂月支の釈尊・真旦の智者大師・日域の傳教、此の三人は内典の聖人なり。

問うて曰く、龍樹・天親等は如何。

答えて曰く、此等の聖人は、知りて之を言わざりし仁なり。或は迹門の一分之を宣べて、本門と觀心とを云わず。或は機有りて時なきか。或は

機時共に之なきか。天台・傳教已後は之を知る者多々なり。二聖の智を用ゆるが故なり。所謂三論の嘉祥、南三北七の百余入、花嚴宗の法蔵・清涼等、法相宗の玄奘三蔵・慈恩大師等、真言宗の善无畏三蔵・金剛智三蔵・不空三蔵等、律宗の道宣等、初には反逆を存し、後には一向に皈伏せしなり。

但し初の大難を遮せば、无量義經に云く「譬之ば国王と夫人と新たに王子を生ぜん。若しは一日、若しは二日、若しは七日に至り、若しは一月、若しは二月、若しは七月に至り、若しは一歳、若しは二歳、若しは七歳に至り、復國事を領理すること能わずと雖も、已に臣民に宗敬する所となり、諸の大王の子を以て伴侶とせん。王及び夫人、愛心偏に重くして、常に与みし共に語らん。所以は何ん、稚小なるを以ての故にというが如く、善男子、是の持經者も亦復是くの如し。諸佛の国王と是の經の夫人と和合して、共に是の菩薩の子を生ず。若し菩薩是の經を聞くことを得て、若しは一句、若しは一偈、若しは一轉、若しは二轉、若しは十、若しは百、若しは千、若しは万、若しは億万・恒河沙无量無數轉せば、復真理の極を躰すること能わずと雖も、乃至、已に一切の四衆八部の宗仰する所となりて、諸の大菩薩を以て眷屬となし、乃至、常に諸佛の護念する所となりて慈愛偏に覆われん、新學なるを以ての故なり」等云云。

普賢經に云く「此の大乗經典は諸佛の寶蔵、十方三世の諸佛の眼目なり。乃至、三世の諸の如来を出生する種なり。乃至、汝大乗を行じて佛種

を断だんぜざれ」等云云。又云く「此この方ほう等とう經きやうは是まなこれ諸佛しよふつの眼まなこなり。諸佛しよふつは是これに因よつて五眼ごげんを具そなへることを得えたまへり。佛ぶつの三種さんじゆの身みは方等ほうとうより生なず。是これれ大法印だいほういんにして、涅槃海ねはんかいを印いんす。此この如ごとき海中かより能よく三種ほんごけの佛しよふつの清しよう淨じようしん身をみ生なず。此この三種さんの身みは人天にんてんの福田ふくでんなり」等云云。

夫それ以おもんみれば、釈迦如来しやくかの一代いちだいの顕密けんみつ・大小だいせうの二教にきやう、花嚴けげん・真言まごん等の諸宗しよしゆの依經えききやう、往ゆきて之これを勤かんがうるに、或あるは十方じつぱう臺葉だいようの毘盧遮那佛びるしやなぶつ、大集だいしゆう雲集うんじゆの諸佛如来しよふつにがら、般若染淨はんやせんじよの千佛示現せんぶつじげん、大日だいにち・金剛頂等こんかうていとうの千二百尊せんにひゃくそんも、但ただ其その近因こんいん近果こんくわを演說えんせつして、其おんの遠いんの因果いんがを顕あらわさず。速疾頓成そくしつとんじやう之これを説せけども、三五さんごの遠化おんけを亡失もうしつし、化道けどうの始終跡しじゆあつを削けずりて見みえず。花嚴經けげん・大日經だいにちきやう等はいちおういちこれを見るみるに、別円べつえん四蔵しぞう等に似にたれども、再往さいおう之これを勤かんがうれば、蔵通ぞうつう二教にきやうに同じおなじて未いまだ別円べつえんにも及およばず。本有ほんゆの三因さんいん之これ無し。何を以もつてか佛ぶつの種子しゆうじを定さだめん。

而しかるに新訳しんやくの訳者等やくしやとう、漢土かんとに來入らいにやうするの日ひ、天台てんたいの一念三千いんぱんさんせんの法門ほふもんを見聞けんもんして、或あるは自みづからの所持しよじの經々きやうきやうに添加そんかし、或あるは天竺てんてくより受持じゆぢするの由よし之これを稱たつとす。天台てんたいの學者等がくしやとう、或あるは自宗じしゆに同おなずるを悦よろこび、或あるは遠とほきを貴たつとみて近ちかきを蔑ないがしろにし、或あるは舊くを捨すて新あらたを取り、魔心ましん愚心ぐしん出來しゆつたいす。然しかりと雖しかも詮せんずる所ところは一念三千いんぱんさんせんの佛種ぶつしゆに非あらざれば、有情うじやうの成佛ぶつじゆも、木畫もくえ二像にざうの本尊ほんそんも有名うみやう无実むじつなり。

問とうて曰いく、上かみの大難だいなん、未いまだ其その會通えつうを聞きかず、如何いかん。

答こたえて曰いく、无量義經むりやうぎきやうに云いく「未いまだ六波羅蜜ろくはらみつを修行しゆぎやうすることを得えずと雖しか

も、六波羅蜜自然じねんに在前ざいぜんす」等云云。法花經に云く「具足の道どうを聞かんと欲す」等云云。涅槃經に云く「薩さとは具足に名づく」等云云。龍樹菩薩の云く「薩さとは六なり」等云云。无依无得大乘四論玄義記に云く「沙さとは決して六と云う。胡法こほうには六を以て具足の義と為すなり」。吉蔵きちぞうの疏しよに云く「沙さとは翻ほんじて具足と為す」。天台大師云く「薩さとは梵語なり、此こゝには妙と翻ほんず」等云云。

私わたくしに會通えつうを加えれば本文ほんもんを躓けがすが如し。余しかりと雖も、文もんの心は、釈尊しやくそんの因行果徳の二法は妙法蓮花經の五字に具足す。我等此の五字を受持すれば、自然じねんに彼の因果かの功徳を譲り与えたもう。四大聲聞しだいしやうもんの領解りやうげに云く「无上ぼうじゆの宝珠ほうじゆ、求めざるに自おのずから得たり」云云。我等が己心こしんの聲聞界しやうもんかいなり。「我が如く等しくして異ことなることなけん。我が昔の所願しよくわんの如き、今者いま已すでに満足まんじゆしぬ。一切衆生いっせしやうじやうを化けして、皆佛道けつだうに入らしむ」。妙覺みやうかくの釈尊しやくそんは、我等が血肉けつじゆなり。因果いんぐわの功徳は骨髓こつすいに非あらずや。

寶塔品に云く「其れ能よく此こゝの經きやう法ぽうを護まもることあらん者は、則ち為これ、我われ及び多寶たふほを供養くやうするなり。乃至なひし、亦復またまた、諸もろもろの来りたまえる化佛けふつの諸もろもろ世界せかいを莊嚴しやうげんし光飾こうじきしたまう者を供養くやうするなり」等云云。釈迦しやくか・多寶たふほ・十方じふぱうの諸佛しよふつは我が佛界ぶつがいなり。其の跡あとを紹繼しやうけいして其の功徳を受得じゆとくす。「須臾しゆゆも之を聞かば、即ち阿耨多羅三藐三菩提あのおくたらしあんみやくさんぼだいを究竟くきやうすることを得ん」とは是これなり。

壽量品に云く「然るに我實このかたに成佛してより已来このかた、无量无边むりやうむげん百千万億那由他劫なゆたこくなり」等云云。我等が己心こしんの釈尊しやくそんは、五百塵点じんでん、乃至なひし、所顯しよけんの

三身さんじんにして无始むしの古佛こぶつなり。經きやうに云く「我本菩薩われもとどの道どうを行じて成じやうぜし所の壽命じゆん、今猶なお未だ盡またかみきず、復上またかみの數かずに倍かすせり」等云云。我等こしんが己心こしんの菩薩ぼさつ等らなり。地涌千界じゆせんがいの菩薩ぼさつは己心こしんの釈尊しゃくそんの眷属けんぞくなり。例たとひせば太公たいこう・周公しゆうこう・旦等たんらうは、周武しゆうぶの臣下しんかにして、成王せいおう幼稚せいじゆうの眷属けんぞく、武内たけのうちの大臣おとどは神功皇后じんぐうこうごうの棟梁とうりやうにして仁徳にんとく王子おうじの臣下しんかなるが如し。上行じやうぎやう・无边行むへんぎやう・淨行じやうぎやう・安立行あんりゆうぎやう等は、我等こしんが己心こしんの菩薩ぼさつなり。

妙樂大師みやうらくだいし云く「当まさに知るべし、身土しんどは一念いっしんの三千さんぜんなり。故ゆゑに成道じやうどうの時とき、此こゝの本理ほんりに稱なづいて一身いっしん一念いっしん法界ほふかいに遍あまねし」等云云。

夫それ始め寂滅じやくめつ道場けぞう花蔵けぞう世界せかいより、沙羅林しゃらりんに終しまるまで五十余年じゅうごねんの間ま、花蔵けぞう・密巖みつがん・三变さんぺん・四見等しけんらうの三土さんど・四土しどは、皆成劫じやうこうの上うへの无常むじやうの土どに變化へんげする所の方便じつぽう・實報じつぽう・寂光じやくこう・安養あんやう・淨瑠璃じやうるり・密巖等みつがんらうなり。能變のうへんの教主けうしゆ涅槃ねはんに入いれば、所變しよへんの諸佛しよぶつ随ずいて滅盡めつじんす。土ども又また以もつて是こゝの如ごとし。

今本時ほんじの娑婆世界しやわせかいは、三災さんさいを離はなれ四劫しけつを出いでたる常住じやうじやうの淨土じやうどなり。佛ほとけ既に過去こくわうにも滅めつせず、未来みらいにも生なぜず、所化しよけ以もつて同躰どうたいなり。此こゝれ即すなはち己心こしんの三千具足さんぜんぐそく三種さんしゆの世間せけんなり。迹門じやくもん十四品じしゆひんには、未だ之これを説とかず。法花經ほふけきやうの内うちに於おても時機じき未熟みじやくの故ゆゑか。此こゝの本門ほんもんの肝心かんじん、南无妙法蓮花經なんむめうほふけきやうの五字ごじに於おては、佛ほとけ猶な文殊もんじゆ・藥王やくおう等らにも之これを付属ふぞくしたまわす。何いかに況いわんや其こゝの已下いげをや。但地涌千界ただじゆせんがいを召まして、八品はつひんを説ときて之これを付属ふぞくしたまう。

其こゝの本尊ほんそんの為躰ためたい、本師ほんしの娑婆しやわの上に、寶塔ほうたつ空くうに居こし、塔中たつちゆうの妙法蓮花經めうほふけきやうの左右さうじやうに、釈迦牟尼佛しゃくじやなんぶつ・多寶佛たふほう。釈尊しゃくそんの脇士わきしは上行等じやうぎやうらうの四菩薩しぼさつ。文殊もんじゆ・彌勒みろく

等は四菩薩の眷属として末座に居し、迹化・他方の大小の諸菩薩は万民の大地に處して雲閣・月卿を見るが如し。十方の諸佛は大地の上に處したもう。迹佛・迹土を表する故なり。

是の如き本尊は、在世五十余年に之無し。八年の間にも但八品に限る。正像二千年の間は、小乗の釈尊は迦葉・阿難を脇士と為し、權大乘並びに涅槃・法花經迹門等の釈尊は文殊・普賢等を以て脇士と為す。此等の佛を正像に造り畫けども未だ壽量の佛有さず、末法に來入して始めて此の佛像出現せしむべきか。

問う、正像二千余年の間は、四依の菩薩並びに人師等、余佛、小乗・權大乘・尒前・迹門の釈尊等の寺塔を建立すれども、本門壽量品の本尊並びに四大菩薩をば、三国の王臣俱に未だ之を崇重せざる由、之を申す。此の事粗之を聞くと雖も前代未聞の故に耳目を驚動し、心意を迷惑す。請う、重ねて之を説け。委細に之を聞かん。

答えて曰く、法花經一部・八卷・二十八品、進みては前四味、退きては涅槃經等の一代の諸經、惣じて之を括るに但一經なり。

始め寂滅道場より終り般若經に至るまでは序分なり。无量義經・法花經・普賢經の十卷は正宗なり。涅槃經等は流通分なり。

正宗の十卷の中に於て亦序正流通有り。无量義經並びに序品は序分なり。方便品より分別功德品の十九行の偈に至る十五品半は正宗分なり。分別功德品の現在の四信より普賢經に至る十一品半と一卷とは流通分

なり。

又法花經等の十卷に於ても二經有り。各の序正流通を具するなり。无量義經と序品は序分なり。方便品より人記品に至る八品は正宗分なり。

法師品より安樂行品に至る五品は流通分なり。其の教主を論ずれば始成正覺の佛、本无今有の百界千如を説きて、已今当に超過せる随自意

・難信難解の正法なり。過去の結縁を尋ぬれば、大通十六の時、佛果の

下種を下し、進みては花嚴經等の前四味を以て助縁と為して、大通の種子

を覺知せしむ。此は佛の本意に非ず。但毒發等の一分なり。二乘・凡夫等

は、前四味を縁として、漸々に法花に來至して種子を顕わし、開顯を遂

ぐるの機是なり。又在世に於て始めて八品を聞く人天等、或は一句一偈

等を聞きて下種と為し、或は熟し、或は脱し、或は普賢・涅槃等に至り、或

は正像末等に、小・権等を以て縁と為して法花に入る。例せば在世の前四

味の者の如し。

又本門十四品の一經に序正流通有り。涌出品の半品を序分と為し、壽量

品と前後の二半、此を正宗と為し、其餘は流通分なり。其の教主を論ず

れば始成正覺の釈尊に非ず。所説の法門も亦天地の如し。十界久遠の上

に國土世間既に顕る。一念三千殆ど竹膜を隔てたり。又迹門並びに前

四味・无量義經・涅槃經等の三説は悉く随他意・易信易解。本門は三説

の外の難信難解・随自意なり。

又本門に於ても序正流通有り。過去大通佛の法花經より、乃至、現在の

花嚴經、乃至、迹門十四品、涅槃經等の一代五十余年の諸經、十方三世の諸佛の微塵の經 々は、皆壽量の序分なり。一品二半よりの外は小乗教・邪教・未得道教・覆相教と名づく。其の機を論ずれば徳薄・垢重・幼稚・貧窮・孤露にして禽獸に同ざるなり。余前・迹門の円教すら尚佛因に非ず。何に況や大日經等の諸小乗經をや。何に況や花嚴・真言等の七宗等の論師・人師の宗をや。与えて之を論ずれば前三教を出でず。奪つて之を云えば藏通に同ず。設い法は甚深と稱すれども、未だ種・熟・脱を論ぜず。「還りて灰断に同ず。化に始終無し」とは是なり。

譬えば王女為りと雖も畜種を懷妊すれば、其の子尚旃陀羅に劣れるが如し。此等は且く之を闕く。

迹門十四品の正宗の八品は、一往之を見るに二乗を以て正と為し、菩薩・凡夫を以て傍と為す。再往之を勘うれば、凡夫、正像末を以て正と為す。正像末の三時の中にも、末法の始を以て正中の正と為す。

問うて曰く、その證如何。

答えて曰く、法師品に云く「而も此の經は如来の現在すら猶お怨嫉多し、況んや滅度の後をや」。寶塔品に云く「法をして久しく住せしむ、乃至、来れる所の化佛当に此の意を知るべし」等。勸持・安樂等之を見るべし。迹門是の如し。

本門を以て之を論ずれば一向に末法の初めを以て正機と為す。所謂一往之を見る時は、久種を以て下種と為し、大通・前四味・迹門を熟と為して、

本門に至りて等・妙に登らしむ。再往之を見れば、迹門には似ず。本門は序正流通俱に末法の始を以て詮と為す。在世の本門と末法の初は一同に純円なり。但し彼は脱、此は種なり。彼は一品二半、此は但題目の五字なり。

問うて曰く、其の證文如何。

答えて云く、涌出品に云く「尔の時に他方の國土の諸の來れる菩薩摩訶薩の八恒河沙の數に過ぎたる、大衆の中に於て起立し合掌し礼を作して、佛に白して言さく、世尊、若し我等、佛の滅後に於て此の娑婆世界に在つて、勤加精進して是の經典を護持し読誦し書写し供養せんことを聽したまわば、當に此の土に於て廣く之を説きたてまつるべし。尔の時に佛、諸の菩薩摩訶薩衆に告げたまわく、止みね善男子、汝等が此の經を護持せんことを須いじ」等と云云。法師より已下の五品の經文、前後水火なり。寶塔品の末に云く「大音聲を以て、普く四衆に告げたまわく、誰か能く此の娑婆國土に於て、廣く妙法花經を説かん」等と云云。設い教主一佛為りと雖も之を奨勸したまわば、藥王等の大菩薩、梵・帝・日・月・四天等は之を重んずべきの處に、多寶佛・十方の諸佛、客佛と為りて之を諫曉したもう。諸の菩薩等は、此の慇懃の付属を聞きて「我不愛身命」の誓言を立つ。此等は偏に佛意に叶わんが為なり。而るに須臾の間に佛語相違して、過八恒沙の此土の弘經を制止したもう。進退惟れ谷まる。凡智に及ばず。天台智者大師、前三後三の六釈を作りて之を會したまえり。

所詮、迹化・他方の大菩薩等に、我が内證の壽量品を以て授与すべからず。末法の初めは、謗法の國にして悪機なる故に之を止め、地涌千界の大菩薩を召して、壽量品の肝心たる妙法蓮花經の五字を以て、閻浮の衆生に授与せしめたまうなり。又迹化の大衆は釈尊の初發心の弟子等に非ざるが故なり。

天台大師云く「是れ我が弟子なり、応に我が法を弘むべし」と。

妙樂云く「子、父の法を弘む、世界の益有り」。輔正記に云く「法是れ久成の法なるを以ての故に、久成の人に付す」等云云。

又弥勒菩薩疑請して云く、經に云く「我等は復佛の隨宜の所説、佛の所出の言、未だ曾て虚妄ならずと信じ、佛の所知は、皆悉く通達すと雖も、然も諸の新發意の菩薩、佛の滅後に於て若し是の語を聞かば、或は信受せずして法を破する罪業の因縁を起さん。唯願世尊、願くは為に解説して我等が疑を除きたまえ。及び未来世の諸の善男子、此の事を聞き已りて亦疑を生ぜじ」等云云。

文の意は、壽量の法門は、滅後の為に之を請するなり。壽量品に云く「或は本心を失える、或は失わざる者あり。乃至、心を失わざる者は、此の良薬の色・香俱に好きを見て、即便之を服するに病盡く除こり愈えぬ」等云云。

久遠下種・大通結縁、乃至、前四味・迹門等の一切の菩薩・二乘・人・天等の本門に於て得道する是なり。經に云く「餘の心を失える者は其の父の來れ

るを見て、亦かんぎ歡もんじん恚もんじんし問訊して病を治せんことを求索むと雖も、然も其の藥を与うるに而も肯て服せず。所以は何ん、毒氣深く入つて本心を失えるが故に、此の好き色・香ある藥に於て美からずと謂おもえり。乃至、我今当に方便を設けて此の藥を服せしむべし。乃至、是の好き良藥を今留めてここに在く。汝取つて服すべし、差いえじと憂うれうること勿なかれ。是の教おしえを作し已おわつて復他國に至り、使つかいを遣つかわして還かえつて告ぐ」等云云。分別功德品に云く「惡世末法の時」等と云云。

問うて曰く、此の經文の「遣使還告」は如何。

答えて曰く、四依しえなり。四依に四類しるい有り。小乗の四依は、多分は正法の前の五百年に出現す。大乘の四依は多分は正法の後の五百年に出現す。三に迹門の四依は、多分は像法一千年、少分は末法の初めなり。四に本門の四依地涌千界は末法の始に必ず出現すべし。今の「遣使還告」は地涌なり。「是好良藥」とは、壽量品の肝要たる名躰宗用教の南无妙法蓮花經是なり。此の良藥をば、佛猶迹化に授与したまわず。何に況や他方をや。

神力品に云く「余の時に千世界微塵等の菩薩摩訶薩の地より涌出せる者、皆佛前に於て一心に合掌して尊顔を瞻仰して、佛に白して言さく。世尊、我等佛の滅後、世尊分身所在の國土、滅度の處に於て、当に廣く此を説くべし」等云云。天台云く「但下方の發誓のみを見る」等云云。

道暹云く「付囑とは、此の經をば唯下方涌出の菩薩に付す。何が故に余る。法是れ久成の法なるに由るが故に、久成の人に付す」等云云。

夫れ文殊師利菩薩は東方金色世界の不動佛の弟子、観音は、西方无量壽佛の弟子、藥王菩薩は、日月淨明德佛の弟子、普賢菩薩は、寶威佛の弟子なり。一往、釈尊の行化を扶けんが為に娑婆世界に来入す。又余前・迹門の菩薩なり。本法所持の人に非ざれば、末法の弘法に足らざる者か。經に云く「余の時に世尊、乃至、一切の衆の前に大神力を現じたもう。廣長舌を出して上梵世に至らしめ、乃至、十方世界の衆の寶樹下の師子座上の諸佛も、亦復是の如く、廣長舌を出したまう」等云云。夫れ顯密二道、一切の大小乘經の中に釈迦・諸佛並び坐し、舌相梵天に至る文之なし。阿弥陀經の廣長舌相、三千を覆うは有名无實なり。般若經の舌相三千、光を放ちて般若を説きしも全く證明に非ず。此れ皆兼帶の故、久遠を覆相するが故なり。是の如く十神力を現じて地涌の菩薩に妙法の五字を囑累して云く、經に云く「余の時に佛、上行等の菩薩大衆に告げたまわく、諸佛の神力は、是の如く、无量无边不可思議なり。若し我是の神力を以て、无量无边百千万億阿僧祇劫に於て、囑累の爲の故に此の經の功德を説かんに、猶お尽すこと能わじ。要を以て之を言わば、如来の一切の所有の法、如来の一切の自在の神力、如来の一切の秘要の蔵、如来の一切の甚深の事、皆此の經に於て宣示顯説す」等云云。

天台云く「余時佛告上行より下は、第三結要付屬なり」云云。

傳教云く「又神力品に云く、以要言之、如来一切所有之法、乃至、宣示

顕説へ已上經文、明らかに知りぬ、果分の一切の所有の法、果分の一切の自在の神力、果分の一切の秘要の蔵、果分の一切の甚深の事、皆法花に於て、宣示顕説するなり」等云云。

此の十神力は妙法蓮花經の五字を以て上行・安立行・淨行・无邊行等の四大菩薩に授与したまうなり。前の五神力は在世の爲、後の五神力は滅後の爲なり。余りと雖も、再往之を論ずれば、一向に滅後の爲なり。故に次下の文に云く「佛滅度の後に、能く是の經を持たんを以ての故に、諸佛皆歡喜して、无量の神力を現じたまう」等云云。

次下の囑累品に云く「余の時に釈迦牟尼佛、法座より起つて大神力を現じたまう。右の手を以て、无量の菩薩摩訶薩の頂を摩でて、乃至、今以て汝等に付属す」等云云。地涌の菩薩を以て頭と爲して、迹化・他方、乃至、梵・釈・四天等に此の經を囑累したもう。「十方より来れる諸の分身の佛、各本土に還りたもう、乃至、多寶佛の塔、還つて故の如くしたまうべし」等云云。

藥王品已下、乃至、涅槃經等は地涌の菩薩去り了りて、迹化の衆・他方の菩薩等の爲に、重ねて之を付属したもう。摺拾遺属是なり。

疑いて云く、正像二千年の間に地涌千界閻浮提に出現して此の經を流通するや。

答えて曰く、余らず。

驚きて云く、法花經並びに本門は佛滅後を以て本と爲して、先ず地涌千

界に之を授与すと。何ぞ正像に出現して此の經を弘通せざるや。

答えて云く、宣べず。

重ねて問うて云く、如何。

答う、之を宣べず。

又重ねて問う、如何。

答えて曰く、之を宣ぶれば、一切世間の諸人、威音王佛の末法の如く。又

我が弟子の中にも、粗之を説かば、皆誹謗を為すべし。黙止せんのみ。

求めて云く、説かずんば、汝慳貪に墮せん。

答えて曰く、進退惟れ谷まれり。誠みに粗之を説かん。

法師品に云く「況んや滅度の後をや」。壽量品に云く「今留めて此に在

く」。分別功德品に云く「惡世末法の時」。藥王品に云く「後の五百歳、

閻浮提に於て廣宣流布せん」。涅槃經に云く「譬えば、七子あり、父母平

等ならざるに非ざれども、然も病者に於て心則ち偏に重きが如し」等云

云。

已前の明鏡を以て佛意を惟知するに、佛の出世は靈山八年の諸人の為に

非ず。正像末の人の為なり。又正像二千年の人の為に非ず。末法の始め予

が如き者の為なり。「然於病者」と云うは、滅後の法花經誹謗の者を指す

なり。「今留在此」とは「此の好き色香ある味に於て、美からずと謂う」者

を指すなり。

地涌千界の正像に出でざるは、正法一千年の間は小乘・權大乘なり。機・

時共に之無し。四依の大士、小権を以て縁と為して、在世の下種之を脱せしむ。謗多くして熟益を破るべき故に之を説かず。例せば在世の前四味の機根の如し。像法の中末に、観音・薬王、南岳・天台等と示現し出現して、迹門を以て面と為し、本門を以て裏と為して、百界千如・一念三千其の義を盡せり。但理具を論じて、事行の南无妙法蓮花經の五字並びに本門の本尊、未だ廣く之を行ぜず。所詮円機有りて円時なきが故なり。今末法の初め、小を以て大を打ち、権を以て實を破し、東西共に之を失し天地顛倒せり。迹化の四依は隠れて現前せず。諸天は其の國を弃てて之を守護せず。

此の時、地涌の菩薩始めて世に出現し、但妙法蓮花經の五字を以て幼稚に服せしむ。「因謗墮惡必因得益」とは是なり。我が弟子之を惟え。地涌千界は教主釈尊の初發心の弟子なり。寂滅道場にも来らず、双林最後に訪わず。不幸の失之有り。迹門十四品にも来らず、本門の六品には座を立ち、但八品の間に来還せり。是の如き高貴の大菩薩、三佛に約足して之を受持す。末法の初めに出でざるべきか。当に知るべし、此の四菩薩、折伏を現する時は賢王と成りて愚王を誠責し、摂受を行ずる時は僧と成りて正法を弘持す。

問うて曰く、佛の記文は云何。

答えて曰く、「後の五百歳に、閻浮提に於て廣宣流布せん」。天台大師記して云く「後の五百歳、遠く妙道に沾わん」。妙樂記して云く「末法の初

め冥利みょうり无なきにあらず」。傳教大師云く「正像やや稍過おわぎ已りて、末法はなは太だ近ちかきに有あり」等云云。「末法太だ近ちかきにあり」の釈しやくは、我が時は正まさしき時に非あらずと云う意いなり。傳教大師、日本にして末法の始めを記して云く「代よを語れば、像ぞうの終り末まつの初め、地ちを尋ぬれば唐とうの東羯ひがしかつの西、人を原たすぬれば則ち五濁ごじよくの生鬪諍しょうとうじょうの時なり。經に云く、猶多ゆた怨嫉おんしつきょうめつどご況滅度後と。此の言良ことばまことに以ゆえ有あるなり」。此の釈とうじょうに「鬪諍とうじょうの時」と云云。今の自界叛逆じかいほんぎやく・西海侵逼さいかいしんびつの二難になんを指すなり。

此の時、地涌千界出現して、本門の釈尊きやうじの脇士なと為り、一閻浮提第一の本尊な、此の国に立つべし。月支がつし・震旦しんたんには未だ此の本尊ましま有あさず。日本国の上宮じやうぐう、四天王寺してんのうじを建立す、未だ時来きたらず。阿弥陀他方あみだを以て本尊なと為す。或は聖武天王しょうむてんのう、東大寺を建立す、花嚴經の教主しやくなり。未だ法花經の實義あらわを顯あらわさず。傳教大師ほぼ、粗法花經そほの實義しやくを顯示しやくす。然りと雖も時未だ来らざるの故に、東方がおうの鵝王がおうを建立す、本門の四菩薩しよせんを顯あらわさず。所詮しよせん地涌千界ちよくせんの為に此これを讓り与たまはるが故なり。

此の菩薩佛勅ぶつちやくを蒙りて近く大地の下に在り。正像せいざうに未だ出現せず、末法にも又出いで来きたらずんば、大妄語だいもうごの大士だいじなり。三佛さんぶつの未來記みらいきも亦泡沫ほうまつに同じ。此を以て之を惟おもうに、正像せいざうに无なき大地震だいしうじ・大彗星だいすいせい等出来す。此等は金翅鳥こんじちやう・修羅しゆら・龍神等の動変どうへんに非あらず。偏ひとえに四大菩薩出現しよだいせんせしむべき先兆せんちやうなるか。

天台云く「雨の猛たけきを見て龍の大だいなるを知り、花の盛さかんなるを見て池の深

きを知る。」等云云。妙樂云く「智人は起を知り、蛇は自ら蛇を識る」等云云。天晴れぬれば地明らかなり。法花を識る者は、世法を得べきか。一念三千を識らざる者には、佛大慈悲を起し、五字の内に此の珠を裹み、末代幼稚の頸に懸けしめたもう。四大菩薩の此の人を守護したまわんと、大公・周公の文王を撰扶し、四皓が恵帝に侍奉せしに異らざる者なり。

文永十年 太才 卯月二十五日  
癸酉

日蓮之を註す

帷かたびら 一つ、墨すみ三長、筆ふで五管給たび候おわいた了おわんぬ。

觀心かんじんの法門ほうもん少々之ちゆうを注おし、太田殿おおたどの・教信御房等きようしんごぼうに奉たてまつる。此この事じ、日蓮にっれんの當身とうしんの大事だいじなり。之こを秘ひして無む二にの志しを見みば、之こを開か拓たくせらるべきか。

此この書しよは難なん多く答こたえ少し。未聞みもんの事ことなれば、人ひとの耳目じもく之こを驚き動どうすべきか。設たと他見たけんに及およぶとも三人四人座ざを並ならべて之こを読よむこと勿なかれ。

佛滅後ぶつめつご二千二百二十余年い、未いまだ此この書しよの心こころ有あらず。國難こくなんを顧かえみず、五ご々百歳ひゃくざいを期ごして之こを演說えんぜつす。

乞こい願ねがわくば一見いつけんを歴へて来きたるの輩ともがら、師弟してい共ともに靈山淨土りようぜんじようどに詣もいで、三佛ぶつの顔貌げんみようを拜見はいけんしたてまつらん。

恐きよう 恐きよう 謹言きんげん

文永十年ぶんえうじゅうねん 太才たいさい 卯月うづき二十六日にじゅうろくにち  
癸酉みづのとりのと

日蓮

花押

富木殿 御返事

觀心本尊抄御副状一

富木殿へ

日蓮